「常世神事件」の謎

古代の明日香と常世神信仰

なら民俗通信 243

武智　功

クーデターの「前哨戦」

《三戸の虫と庚申待》

潔斎（けっさい）をして神仏を祀りながら夜を明かす民間信仰の一つに、「庚申（こうしん）待ち」がある。人の体内には三戸（さんし）の虫が住んでおり、庚申の日の夜に寝ていると虫が天に昇り、その人が犯した罪を天帝に告げて寿命を減らされてしまう。それで、その夜は寝ずに神仏（猿田彦神〈さるたひこのかみ〉や青面〈しょうめん〉金剛）に祈るという信仰だ。

県下では奈良町（奈良市）や大和小泉の庚申堂がよく知られ、身代わり申（さる）のお守りが家々の軒に吊り下げられている。

この庚申信仰は、福、禄（財産）、寿（長命）、とりわけ不老長寿を願う中国の民間道教の影響による信仰で、すでに平安時代には貴族の間で行われていた。『源氏物語』や『枕草子』に記述があるほか、『台記』などの史料に「守庚申」「守三戸」などと見えている。

《古代から道教の影響が》

道教の影響は庚申信仰だけではなく、日本の固有信仰と習合した節供（せっく）や、時代は下るが大安、友引などで知られる六曜など、現在の暮らしの中にも濃厚である。

道教の伝来は古く、古墳時代の鏡には道教に基づく神獣の図柄も見られる。飛鳥時代の皇極・斉明天皇や天武天皇などは道教信仰との関係が深く、明日香村の亀形石造物などは、まさに道教信仰を形で表したものだ。『日本書紀』には、道教に関わる殺牛馬の祭祀も記されている。

また、天武天皇の和風諡号（しごう）「天渟中原瀛真人」（あまのぬなはらおきのまひと）の瀛（えい）は、道教の東方三神山のひとつであり、「真人」は道教の仙人を意味している。

《常世神の事件》

飛鳥時代には、三戸の虫ではないが、蚕（かいこ）に似た虫を祭る民間道教に基づく信仰も流行していた。「皇極紀」3（644）年秋7月条には、大生部多（おおうべのおう）という人物と巫覡（ふげき＝神霊などの憑依〈ひょうい〉によって託宣を行う宗教者）等が、蚕に似た虫を常世神（とこよのかみ）として祭れば富と長寿を得ると言って、常世神の信仰を人々に広めた。しかし益するところが少なく秦河勝（はたのかわかつ）が弾圧したという、いわゆる「常世神事件」の記載がある。

従来は事件の発生場所を東国富士川付近とし、神道や仏教と道教の宗教的対立という視点などから説明されてきた（註1）。しかし事件は明日香の地で発生し、事件の本質も秦氏の職掌や政治的立場によるものであった。

《事件の発生場所》

事件の発生場所が東国だとされてきたのは、条文冒頭に常世神信仰を広めた大生部多について「東国の富士川付近の人」との記述があるからだ。しかし、これは大生部多の本貫地を示したにすぎない。事件は東国から上京した大生部多が、明日香の地で常世神信仰を広めたことにより発生した。

道教の神仙思想に関わる亀形石造物＝明日香村

明日香で発生したと考えられるのは①「皇極紀」には大和国内での巫覡の盛んな活動が描かれている。常世神事件の条文も「巫覡等、遂に詐きて」と書かれていることから、一連の記述に登場する大和国内の巫覡が「遂に欺いて起こした」と考えられる②また「都鄙（ひ）の人」という表現が用いられているが、「都鄙」とは「都と田舎」という意味であり、事件の背景に明日香の地があったと考えられるからだ。

《事件の歴史的意義》

大生部多が壬生部（みぶべ＝皇子の養育に資する部民）であったこと、壬生部は軍事力となったこと、秦河勝の職掌が壬生部（上宮乳部）の管理と、調糸を主に収納する大蔵の管理であったこと、皇極朝においては蘇我石川麻呂が蔵に関して統轄的役割を担っていたことは、先学の研究で明らかである（註2）。

これらを基に、この事件には次のような意義が認められる。

①秦河勝の職掌的立場からいえば、東国から上京した壬生部・大生部多が畿内で不穏な行動をとったので、壬生部の管理者として弾圧した。また蚕ではなく、蚕に似た虫を「常世神」として広める信仰は、調糸（絹糸）の生産・収納や品質管理に悪影響を及ぼすもので、大蔵の管理者としても弾圧した。

②常世神事件は、「大化の改新」（乙巳〈いっし〉の変）の約1年前である。秦河勝は職掌上だけではなく、政治的にも乙巳の変で中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）と共に蘇我氏を打った蘇我石川麻呂と密接であったと考えられ、共に反蘇我本宗家（蝦夷・入鹿〈えみし・いるか〉）的立場にあった。それゆえ河勝の政治的立場から見れば、常世神信仰を弾圧した河勝の背後に乙巳の変のクーデター勢力が存在していたと考えられる。

クーデター側としては、1年後に起きる乙巳の変に備えて軍事力を統制・確保しておく必要があった。大生部多が壬生部（上宮乳部）である事、壬生部が軍事力であり、かつ秦氏の管理下にあった事を考えれば、大生部多弾圧には、河勝を通じてその管理下にある壬生部（上宮乳部）を完全に統制・掌握し、有事の際の軍事力としておくという意義があったと考えられる（註3）。

残念ながら現代の大和の国には、常世虫を祀る信仰の痕跡は見あたらない。

（たけち・いさお＝奈良民俗文化研究所研究員）

【註】（1）下出積與『日本古代の神祇と道教』（吉川弘文館／1972年）ほか▼（2）加藤謙吉『秦氏とその民―渡来氏族の実像』（白水社／1998年）、前川明久「大化前代の下総地方について―私部と壬生・壬生部の設定をめぐって」（『続日本紀研究』137／1967年）、平野邦雄『大化前代社会組織の研究』（吉川弘文館／1969年）、直木孝次郎「大蔵省と宮内省の成立」（『飛鳥奈良時代の考察』高科書店／1996年）・「大化の改新」（『日本古代国家の構造』青木書店／1958年）ほか▼（3）武智功「皇極紀にみえる常世神事件の再検討」（『日本歴史』792／2014年）